
編集者 天突(てんつき) ~ファンレター~

きつねぼうや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

編集者 天突てんつき 〈ファンレター〉

【Nコード】

N0275B

【作者名】

きつねぼつや

【あらすじ】

悪質なワナが仕組まれたファンレターが、小説家のもとに届けられる。小説家を守るため、その担当編集者は、悪党どもと対決することになる。

肩幅が広く、背の高い人影が、錆びついた階段をきしませ、二階へのぼる。各戸の前におかれた、洗濯機や自転車の横をとりぬけ、一番奥の部屋の前にたつ。インターホンもベルもない。ドアを直接、二回ノックする。

ドアが開いて、無精髭の鈴懸すずかけが顔をのぞかせた。

「ああ、どうも・・・、いらつしやい」

鈴懸に招かれて、部屋にあがる。玄関をくぐり、鴨居も頭を横に倒すようにしてとおる。

女である。鈴懸の部屋にやってきたのは、たいへん大きな女である。ただの大女ではない、著しく発達した筋肉は、並の男以上で、プロレスラーなみである。女の名は「天突てんつき」、鈴懸の担当編集者である。

柔道、空手、合気道にたけた彼女の言動は、自信にあふれていた。そんな彼女に対し、鈴懸は苦手意識を感じていた。また本気でやれば、こんな女になんか負けやしないと、対抗意識さえもっていた。小学生のころから鈴懸は、ひかえめな女の子が好みなのだった。

鈴懸が笑顔を引きつらせる。

「悪いんだけど、もうちょっと時間もらえないかな？」

「先生、もう締切日を二日もすぎてるんですよ。これ以上は待てません。すぐ書いてください」

天突は鈴懸の両肩をつかみ、机の前のイスに座らせる。さらに肩の上から力を加える。

「書き終わるまで、一步も動いてはいけません」

まるで、小学生の子どもに宿題をさせる母親だ。

鈴懸は反論することができなかった。

天突は鈴懸の仏頂面に笑顔をむけると、カバンの中から五通の手

紙をとりだし、机の上に置いた。出版社に届いた、鈴懸あてのファンレターである。

鈴懸の書いた小説が、じわりじわりと売れはじめていた。

鈴懸は、リボンで飾られた誕生日プレゼントをもらった子どものように、目を輝かし、封を切った。

読者からの応援の手紙。そのうちの一通に目がとまった。読書感想のあとに、一言そえられている。

「追伸、困ったときは、いつでもどうぞ」

そして、httpで始まる、ホームページアドレスが記されている。

差出人の名前はないが、便せんは、淡いピンク色で、文字は丸みをおびている。若い女のものにちがいない。

困ったときは、どんなときだろう。お金がないときか？ 仕事のスランプのときか？ それとも・・・？

それに、いつでもどうぞとは、なんだろう。どう、助けてくれるつもりなのだろうか・・・。

鈴懸はさりげなくうしろをさぐる。

天突は壁の前のイスで写真週刊誌を見ていた。

「最近、この雑誌もネタぎねね・・・」

天突は鈴懸がふりむいてることに気がつくと言った。

「鈴懸先生も、こういう雑誌のスクープ記者には気をつけてくださいよ。変な写真撮られないでくださいね」

鈴懸も、見ばえはパツとしないが、小説がヒットして、ちょっとした話題の人である。

「ああ、気をつけるよ・・・。それより天突ちゃん、ちょっとしたのが乾いちゃって・・・」

ジュースを買いにいくと席を立とうとした鈴懸を制して、天突が立ちあがる。

「先生は書いてて下さい。動いてはダメだって言ったじゃないですか」

天突が部屋をでると、鈴懸は「作戦成功」とつぶやいてインターネットを開始した。先程のホームページアドレスを入力した。ウェブサイトに接続し、画面が表示される。文字ばかりの画面が開かれた。鈴懸は顔を近づけて、画面の文字を読む。

「親愛なる鈴懸先生へ。」

次の随筆文を先生にさしあげます。遠慮なくお使い下さい。なにも心配いりません。どうぞ安心して、使ってください」

そのあと、三〜四行の空白があり『池のコイ』と題した随筆文がある。内容は全くみごと、とても素人の文章とは思えない。否、それどころか、まさしく名文中の名文である。今の日本にこれほどすぐれた書き手がいるとは信じがたいほど。

今、出版社から鈴懸に依頼されている内容は、実のところ『池』というテーマの随筆文なのであった。

「これ、ただこれ！」

鈴懸は画面上の印刷ボタンを押した。

五〇〇ミリリットルの缶コーラを右手に二本、左手に二本持って、天突が戻ってきた。

鈴懸はコーラを一本つけとり、かわりに、例の随筆文を印刷した用紙を、天突に渡す。

「ええ？ 書けたんですか。いつのまに・・・」

天突が原稿に目をとおす。しばらく、食い入るように読んでいた天突が顔をあげる。

「これ、どうしたんですか」

「なにが？」

「これ、先生の書いた文章じゃないですよね」

天突の顔が厳しくなり、鈴懸はおびえたようにつぶやく。

「・・・どうして、・・・わかるかな？」

天突は用紙を引き裂き、粉々にして床に叩きつけた。

「他人の書いたものを、自分が書いたもののように装うなんて、最

低です。作家としてのプライドはないんですか、みそこないました。先生のやるうとしたことは『盗作』なんですよ！ ケイベツします！」

鈴懸は手のひらを胸のあたりで下に伏せる動作を繰り返えし、天突を落ちつかせようとした。

「まあまあ、悪かったよ。でもね、盗作じゃないんだよ。ドロボウしたんじゃないんだ。これ、頂きものなの……」

「どういうこと……。ちゃんと、全て話してください」

天突は、鈴懸をにらみながら、缶コーラのプルトップをひき抜いた。

鈴懸の話の全てききおえた天突は、パソコンにブックマークされていたアドレスを消去し、それが記されていたファンレターをとりあげ、先程同様粉々に切り裂いて、ゴミ箱に叩き入れた。

「先生、二度とこんなことをしないでください。もっとプライドを持って仕事をしてください」

天突の剣幕に圧倒され、鈴懸は「スマン」という言葉を十五回もくりかえした。

さて、はかりごとを、いとも簡単にみやぶられた鈴懸は、自分で書くしか道はのこされていなかった。

なにも書かれていないパソコンの画面を見つめ、ときおり、指先でペンをクルリとまわした。

もしかしたら、永遠になにも書かけないかもしれないという不安を、必死にこらえる。私は作家だ、必ず書けるはずだと、自己暗示をかける。それでも、書けずに時間だけが過ぎていく。そのみえない時間が、鈴懸の自己暗示を砕きつくす。

鈴懸は腕を広げ、上を向いて伸びをする。手のひらは強くにぎりされている。

無をにぎりしめる。

これからだ。自分がなにひとつ持っていないということ意識し

たとき、はじめて、言葉がうまれてくる・・・。

数時間後の深夜、鈴懸のパソコンの画面には、鈴懸の生々しい言葉が、無数に表示されていた。もう少しだ。ゴールはみえてきた。

天突は、夜食を買いに、コンビニエンスストアに出かけた。アパートのきしむ階段をなるべく静かに降りていく。

どこかから、声が聞こえた。アパートの前の薄暗い公園で数人の男が、たむろしている。こんな真夜中に、あやしいこと、このうえない。こちらを見ているようでもある。

天突は、階段を降りきると、公園に背をむけて歩き、角を曲がった。そして裏道を走って、公園の後ろ側にもどってきた。男たちに気づかれぬように、そーっと近づぐ。

男は四人。鈴懸のアパートの方を向いている。天突は男たちの声が聞きとれるところまで接近した。

「作家なんてのは、青白いモヤシだよ。鈴懸だってチョンチョンとつつつけば、すぐ折れちまう」

「へっへっ、まったくですね、チョンとしたらパキンって折れますね」

若い男が調子を合わせた。

「今、あの部屋で、鈴懸がなにやってると思う？　へっへっ、ただいま、盗作のまつさいちゆうです」

四人が、声をこころして笑う。その四人のすぐ後ろに天突が立った。どすのきいた声をはなつ。

「なんだとコラ！　おまえらスクープ屋だな」

四人が一斉にふりかえった。天突をまじまじと見る。

「なんだ大女。おどかさすんじゃねえ」

天突がにらみつける。

「あの、ファンレターを送ったのもおまえらの仕業だな。で、あの随筆文を書いたやつはどいつだ」

一人の男が得意気にニヤつく。

「さてはおまえは、鈴懸の女編集者だな。まあいいや、教えてやる

う。あれはな、朝田次郎の随筆文だよ。ちょっとハッキングしてやったのさ、いい随筆文だったかい、ハハハ・・・」

朝田次郎といえば、超一流の売れっ子作家である。

別の男が話をひきつぐ。

「鈴懸が朝田の随筆文を盗作、なんてことになれば、こんな面白いネタはないからな。それにもし、盗作までしなくても、あの朝田の名文をみたら、鈴懸も動揺するだろう。自分の無能さに絶望して、あの窓から飛び降りんじゃないかと、だからおれたちはこうしてカメラで狙っているわけさ」

天突が奥歯をかみしめる。

「おまえらの言うとおり、鈴懸先生は自分の無能さに絶望的になってるよ。でもな、絶望的になっても書くのをやめないんだぞ。絶望して書くことがどれほど辛いことか、おまえらには分からないのか。鈴懸先生は私の目の前で、見えない血を吐きながら書いてるんだよ。その先生の気持ちをもてあそびやがって、許せない！」

四人が天突を囲う。

「おまえ、好き勝手に言いやがって。女だからって、甘くしねえぞ、痛いおもいをさせてやる」

天突の前後左右に四つのナイフが突きつけられた。

プリンターの前にうつぶせに倒れている鈴懸。右手には、完成した原稿がにぎられている。

数時間前に無をにぎりしめたあの右手が、今は、生まれたての原稿をしっかりとにぎりしめている。

天突が部屋に戻ってきて、おどろいて鈴懸にかけよる。鈴懸は眠っている。

天突は静かにしゃがみこみ、鈴懸の手から原稿をぬきとった。

「鈴懸先生、おつかれさまでした。前の原稿の締切とひき続きで、一週間も徹夜でしたね・・・」

天突は、深い眠りにについている鈴懸をかるがると持ちあげ、布団

に運んでやった。

原稿をカバンに入れた天突がアパートの階段を降りた。天突はなにかを思いだしたように、携帯電話を取りだし、番号を押す。――九番。

「男の人が四人、公園で倒れてます・・・」
天突は傷ひとつ負っていなかった。

(おわり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0275b/>

編集者 天突（てんつき） ~ファンレター~

2010年10月8日15時10分発行